



みらい カフェ だより
#0

21





まちに活き、市民とつくる、参画交流型の美術館

21世紀の美術館には、教育、創造、エンターテインメント、コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割が期待されています。金沢21世紀美術館は、広く人々と連携を図り、全く新しい美術館活動を目指しています。

みなさんが金沢21世紀美術館（愛称：まるびい）に行こうと思うのはどんなときでしょうか。

展覧会や演劇を鑑賞する、造形プログラムやギャラリー・ツアーに参加する、

ミュージアム・ショップやレストランでお気に入りのものを探したりライブラリーで雑誌を読んで過ごす。

「美術館」の使い方はいろいろですが、そのどれもがあなたのためにあります。

毎日の通勤通学に自転車で通過する、好きな作家や演奏家の作品を説いていた家族や友人を見る、

友人の誕生日のプレゼントを選びに来る、天気の良い日に広場でお弁当を食べる、自分の作品を発表する。

こうしたすべての出来事は、公式な場所で公のサービスによってのみもたらされるのではなく、

あなたが使うことではじめて形づくられる、公（パブリック）と私（プライベート）のユニークな融合といえます。

まるびいは国内外の多くの方々でぎわっていますが、それは美術館がというよりも、街のみずみずしさや活気が、

そのまま美術館と地続きにあることの現れであり、まるびいが街から切り離された特別な場所ではなく、

あなたの毎日の暮らしに続くひとつの場所であるからといえるでしょう。

「まるびいみらいカフェ」は、こうしたまるびいと金沢の街の、

より良い「未来」について考える人々が集まる場所や活動の総称です。

わたしたちはかつてない規模で、地域の中から居心地のよい公共空間を失いつつありますが、

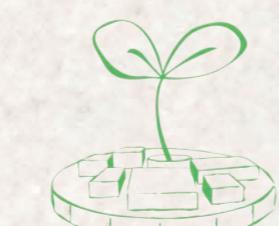
まるびいがみなさんにとって馴染み深く、想い出や愛着の詰まった

「わたしたちのための場所」になることを目指しています。

「カフェ」のような気軽さで、居心地の良いユーモアと暖かさに溢れた場所に集い、

わくわくしたりドキドキする、金沢やまるびいの未来を、これからも提案していきます！

みらい カフェ？



私の とっておき まるびい！



「まるびい」の春夏秋冬の楽しみ方を、
みらいカフェのボランティア・メンバーの
とっておきの写真と言葉でご紹介します。*



オラファー・エリヤソン「カラー・アクティビティ・ハウス」
©2010 Olafur ELIASSON photo: KOKU Keizo



THE まるびい
by 長田あかり
ここが私にとって、いちばんまるびいらしい場所。



月を測る男
by 松本収子
美術館の屋上で、毎日雲を測っていたら飽きちゃった。たまには月でも測ろうかな。



スイミングプール
by 鵜澤一子
深海の中の光の揺らめきに身をゆだねてみませんか？



光と群青のコントラスト
by 宮川俊則
空が茜色に染まり、夜の帳が下りる頃、タレルの部屋は神秘的にその姿を変えます。



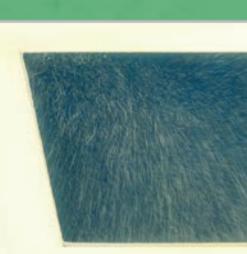
壁を測る男
by 川江英樹
秋の夕方はまるびいの壁を測っているよ。



長生きの楽しみ
by 野村信行
ボケない秘訣は、ほんわかしたボランティア活動。長生きしてまるびいを大切に育もう。



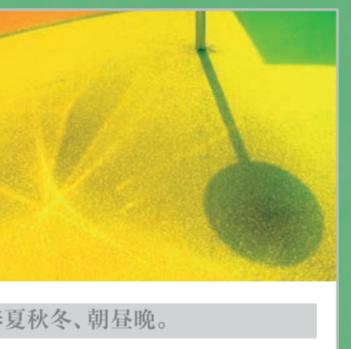
私の指定席
by 福田雅幸
この透明椅子に腰かけ、行き交うひとの様子を、のんびり眺めているのが、好きです。



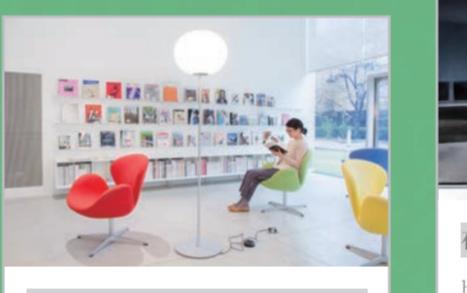
ある冬の夜のタレル
by 西川幸洋
その日、急に猛吹雪に。
「タレルの中は、どうなってる？」
雪のタレルを独り占めにした超贅沢な瞬間でした。



親子で実験！
by 小泉希望
親子一緒にアイデア溢れるものづくりができるのは、まるびいのキッズスタジオだから。
自然とアイデアも浮かびます。



春夏秋冬、朝晩晩。
by 越野節子
365日、いつでも待っていてくれる、そんなあなたとともに見たい。
体験したい。そこにあるから。



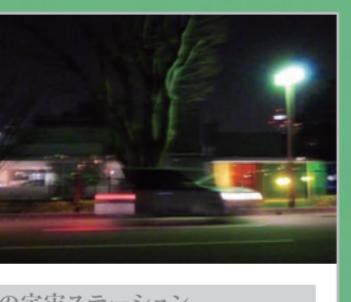
居心地のよいところ
by 石田道房
「アートライブラリー」は、街のオアシスの役目を果たしてくれる大切なところです。



夜の幻想美術館
by 川守さくら
ガラス越しの幻想世界。
靴音もカツーン！と長く、カン！と短く。



まるびい○○探検
by 岩崎木綿子
真っ白丸のまるびいですが、よく探して！実は真っ白丸丸だけではないですよ。



夜の宇宙ステーション
by 岩本真希子
遅くなったり仕事の帰り道、車窓から見える光と色の渦。
ひっそりと鎮座する夜行船。



おーい。
by 五十田紗知
見知らぬ誰かと秘密の会話。



不思議な世界
by 林朋子
私はどこを向いて立っているのだろう？
色が移ろい、私も移ろう雪の朝。



おぼれているボク
by 村中泰雄
あなたは天国を見たことがありますか？
僕はこのブルの底から青空を見上げ、
天国から誰かが手招いてる様に感じた。



よるの廊下
by 仁歩義晴
10年の歩みを廊下は知っている。通りすぎ、立ち止まる。心が綺麗になったのだろうか。



みらいカフェのシンボルであるロゴマーク。
まるびいからすぐっと伸びる、みずみずしい芽。
このロゴマークを手がけてくれたのは、奈良雄一さん。

木々が芽吹きを待つ3月のなまば、このロゴが持つ
エネルギーの秘密を知りたくて、能登島へ行きました。

取材・文：片石憂衣



能登のくらしからみえる未来

3月17日の能登島は、快晴。ひさしぶりのやわらかい陽射しに自然と笑顔もこぼれます。同じ石川でも金沢と能登島ではずいぶん気候も違うんだそう。能登島は穏やかな内海に浮かぶ島だから。

奈良雄一さんはその小さな島で「能登デザイン室」という事務所を立ち上げ、デザインや建築の仕事をしながら家族と暮らしています。



ご自身で設計したお家は「アテ」と呼ばれる能登ヒバを全面に使用。木の爽やかな香りが部屋にいるだけでリラックスさせてくれます。

写真奥の「窓」から望む景色が設計の念頭にあったそうです。

そこから眺める能登島の風景は、まるで絵画のようでした。

奈良さんは、イタリアで建築事務所に勤めた後、日本へ帰国する時に能登島への移住を決めたそうです。東京出身の若者が石川の能登島へ……。なんだか大きなギャップを感じますが、奈良さんはそこで生まれ育ったかのようにとても自然に暮らしていました。

能登島には、看板を大きく掲げた場所はありません。都市の生活に慣れた人はなんだか時間を持て余してしまいそうです。けれど、奈良さんに能登島で

の過ごし方を聞くと「いろいろやることがあるんですよ」とのこと。そのなかでも畑や田んぼは、奈良さんが毎日の時間の中で大切にしていることのひとつです。

島のお年寄りに「使ってない田んぼあるから、やってみない?」と声をかけられたことがきっかけで始めたお米作りは、よりよいお米作りを自分たちで考えながら毎年試行錯誤しているそうです。ほかにも能登島での時間を楽しめるカフェやお店の計画を仲間と練ったり、島の陶芸家と一緒にものを作ったり……。奈良さんの毎日に、持て余す時間はないようです。

「都会は誰かが用意した場所ばかりですよね」と奈良さん。管理された公園や、いつでもなんでも手に入るショッピングセンターで感じる居心地の良さは、どこにでもあるようなものかもしれません。でも、Wi-Fiもコンビニもほとんどない能登島だからこそ、自分の心や感覚のすべてを使って楽しむことができる……。一步踏み出ると、能登島はたくさんの可能性で溢れています。いま能登島では、集落でひとつの営農方針を決めていく「集落営農」が始まっているそうです。営農へのこだわりは人それぞれ。奈良さんのように移住してきたばかりの若い人も含め、幅広い世代の人たちが集まりひとつの方針を決めるそうです。

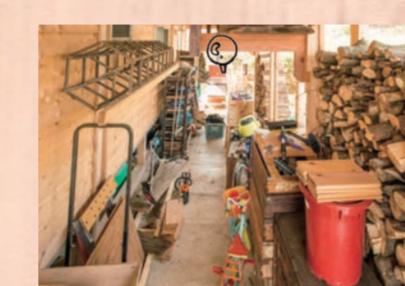
お話を聞くとなんだか難しそうですが、「みんなで集まって、ワイワイ話して時間が経つうちに、自然とひとつの方向に向かっていくんですね」。もともと移住者が多かった能登島では、新しいものを穏やかに受け入れ育していく風土があるのかもしれません。



奈良さんデザインの
カッコー時計「CUCCU」。
頭上には大きな虹が!



手づくりのもちびクラッカー
と夏のオランジェットは、
とてもやさしいお味でした。
アフリカのチーク材の机は
DIY。天板に書かれた矢印
は木目の方向を読むための
ものだそうです。



玄関の脇には暖炉のための
薪が高く積まれています。
春の畠の道具も並びます。

「奈良さんにとって、未来とは?」

たっぷり考えた後に、こう答えてくれました。
「今とずっと繋がっている、延長線上にあるもの。」

自分の内側に備わっている素直な感覚と一緒に毎日を過ごす。ワクワクの種を、島のみんなと楽しみながら丁寧に育てる。そんな能登島での毎日には、わたしたちの未来をもっと豊かにするヒントが隠れているのかもしれません。

奈良雄一(なら ゆういち)

1977年東京生まれ。2006年能登島に移住し、能登デザイン室を設立。ローカルな素材や技術を学んで活かし、日々の暮らしを豊かにするデザインを心がけている。デザイン活動の傍ら不耕起地の田んぼを借りて米づくりも行なっている。



2015年3月7日のボランティア交流会で講演する武野一雄さん。

暇つぶしからボランティアへ 身勝手からおもてなしの心へ

金沢ボランティアの顔のひとりである武野一雄さん。

「まいどさん」(☆1)や、まるびいの「クルーズ・クルー」(☆2)のボランティアを10年間続けていらっしゃる武野さんには、ボランティアを始めたきっかけや、その魅力をお話ししていただきました。



2 ボランティアは市長、館長の代理である!

1 ボランティアをはじめたきっかけ!

私は定年してからというものひとりの気楽さで家にこもり、気ままに過ごしておりました。半年ほどするとカミさんが、どこからかボランティア大学校のチラシを持ってきた。気にも留めずにいたのですが、その中の「観光コース」という文字が目についてしまった。なにやら金沢の歴史や文化、そんなことが学べるという。そこで応募したら、なんと! 入校できることになったのです。

そんなわけで、重い腰をあげて外に出ました。そして、2年間、金沢の歴史や文化について学んでいくうちに、なんだか目覚めてのめりこんじやったんです。



名物まいどさんである武野さんとの出会いは、いまから20年以上前の小立野のとあるお店で、マスターと客という関係でした。いつも会計をやっていた私は、レジ横でナイター中継をながめながら、よく武野さんと世間話をしたものでした。それが金沢21世紀美術館などで子どもたちと一緒にワークショップをするなど、また開拓を持つことになるとは。人と人の出会いは面白いものです。(わたなべ ひであき)



☆1 まいどさん
がんこな魅力あふれる金沢をより深く知ってもらうため、お客様に応えて、どこでも案内してくれる観光ボランティアガイド。



☆2 クルーズ・クルー
ごどもたちアートの出会いをともにする美術館体験プログラム「ミュージアム・クルーズ」のボランティア。

3 ガイドではなく、コミュニケーション!

まるびいがオープンする夏に
「解説スタッフの募集」というのがありました。

そこではお客様に向けてガイドする前に、

ホテルのコンシェルジュや

大学の先生を呼んで、お客様への接遇や現代アートについて学びました。

しばらくして始まったクルーズ・クルーでは、感じる心をこどもたちに教えてもらいました。

歴史や文化だけでなく、
お客様やこどもたちに向けての
「ボランティア」に目覚めていったのです。

そして結局、

「ガイドはコミュニケーションなんじゃないか!」
と思い始めました。

自分の知っていることを一方的にお話しして押しつけるんじゃないにね。

4 おもてなしは健康だ!

最初はおもてなしがなんなのか、よくわからなかったのです。

そこで辞書を引いて……

おもてなしは「心で」などと頭ではわかったつもりでおったんです。

先日ある講座にいき、こんな話をされました。

『病気になったら自分のことで精いっぱい。心をこめて相手の立場にたつことも、気配りも、目配りも、できるわけない。』

それを聞いて目からうろこでした。

まずは健康! 自分の元気をキープすることが一番。そして体が続く限りボランティアは現役!

この美術館では、ボランティアについてや感性、こどもたちからは素直な心を学びました。

お客様からはおもてなしの心を学びました。学ぼうとするかぎり、私の老後はきっと来ない、そんなふうに思います。



ボランティア・メンバーが「まるびいみらいカフェ」を通じて美術館で自分なりにできることやしてみたいことを紹介するコーナー「わたしのみらいカフェ」。

第1回は、「高齢者にも金沢21世紀美術館に来てもらいたい」という福田雅幸さんにその思いを伺いました。

語り手：福田雅幸
聞き手：渡辺秀亮

——まずは、まるびいみらいカフェに参加した動機からお聞かせください。

私自身が金沢市の職員として「まるびい」の立ち上げに関わり、オープンの日にも立ち会いました。ちょうど開館から10年経ち、大勢のお客様にご来館いただいているが、さらに多くの方々に美術館の良さを知ってほしいと思いました。その働きかけを自分ですることはできないかと思い、みらいカフェに参加したわけです。

——みらいカフェのこれまでの活動で印象的だったことはありますか？

2014年10月9日の開館10周年イベントで、みらいカフェのメンバーで力を合わせてお月見カフェを開催できて本当に良かった。みんなで力を合わせればいろいろなことができると確信しました。

——みらいカフェでやっていきたいことや、その思いについて教えてください。

参加した時の初心を思い返して、どんな事ができるかと考えていた時に、私事ですが、義父が94才で亡くなったんです。たぶん金沢にずっと暮らしていたのでしょうかが、一度もまるびいに足を踏み入れることがなかった。長く金沢で暮らし

ているお年寄りの方々にも、生きている間に1度でもまるびいに来てもらえたら、こどもたちとのプログラム「ミュージアム・クルーズ」のように年配の方に足を運んでもらう仕組みをつくれるのではないかだろうかと思いました。

——そのために具体的なプランなどはお考えですか？

金沢市の生涯学習、金沢市高砂大学校の関係者を対象に、「ミュージアム・クルーズ」のようなイベントが実現可能なのではないでしょうか。月に1回20人程度でも、1年間で200人以上の方をお招きできます。とにかく他の場所でやっていないことを続けて行くことに意味があると思います。もちろん継続という意味では、みらいカフェのメンバーだけでは難しいと思いますが、お招きしたお年寄りがガイド役になっていく場合もあるでしょうし、ボランティア養成の金沢ボランティア大学校の研修が終わった方々を協力者として巻き込む事もできるのでは。老々ガイドだと、ベースもつかめるし案内される方も遠慮しなくていいかもしれません。シニアの力があつてこそシニアを呼べるのではないかでしょうか。

——ぜひ実現に向けて、みらいカフェのメンバーと、いろいろなことを一緒に取り組んでいきたいですね！ 本日はどうもありがとうございました。



福田雅幸(ふくだまさゆき)

昭和22年に金沢で生まれ、高校卒業後、6年間を県外ですごすも、68年の人生のうち、62年間をとっぷり金沢でくらす。この間、金沢市役所に勤務し、新幹線対策室や金沢美術工芸大学事務局の業務に携わる。現在は、妻とともに、美術・工芸作品の鑑賞に、全国のミュージアム巡りを楽しんでいる。

サポートスタッフ室

リニューアルについて

まるびいにはボランティア活動の拠点となるための部屋「サポートスタッフ室」があります。灰色のスチール棚と会議机の置かれたこの部屋が、まるびいをサポートしようと集う人々がより心地よく使えるように、2015年3月に、そのリニューアルを建築家集団の「ドットアーキテクツ」にお願いしました。

2014年夏に「3.11以後の建築」展「市民ギャラリートライアル」というプログラムをきっかけに、金沢21世紀美術館に通う機会がありました。その中で来館者の方が思い思いの過ごし方を、様々な場所に見いだす姿を見かける度に心地良さを感じていました。建物周囲の芝生ひろばや、館内の大きなベンチだけでなく、地下の階段まわりにもソファが置かれ、歓談していたり休憩していたりする姿を見かけます。

サポートスタッフ室はその脇にありながらも、一見すると誰も存在を知らないのではないか?と思うほど閉鎖的な印象でした。思い思いの過ごし方の延長線上にサポートスタッフ室も繋がって欲しいと思い、まずはサポートスタッフの方々の活動を来館者が知ることができるよう、既存の小窓をショーウィンドウのように見立て、窓台を設えなおすことで、インフォメーションの役割を持たせることを考えました。

また、サポートスタッフ室には、ミーティング／ワークスペース／ストックという3つの機能が必要なことが利用者や関係者へのヒアリングからわかりました。しかし、この3つの機能ごとに部屋を分けるには、12帖ほどの部屋では決して十分な広さとは言えません。そこでゆるやかに手前と奥をつくりながら、機能を重ねることでそれらの解決を試みました。手前にはドッソリとしたテーブル、外と繋がるきっかけを担う出し可能なコマ付きの半丸テーブル、ホワイトボードやハンガー掛け、椅子にもなる手荷物ボックス、情報共有ラックなどを配置することで、ミーティングとワークスペースを兼ねることにしました。手前と繋げながら奥をつくるために、ホワイトボードとナチュラルな木目の板で囲い込んだ既存ロッカーを壁から少し離して設置し、裏側へまわるとストックを満たすレイアウトとしました。

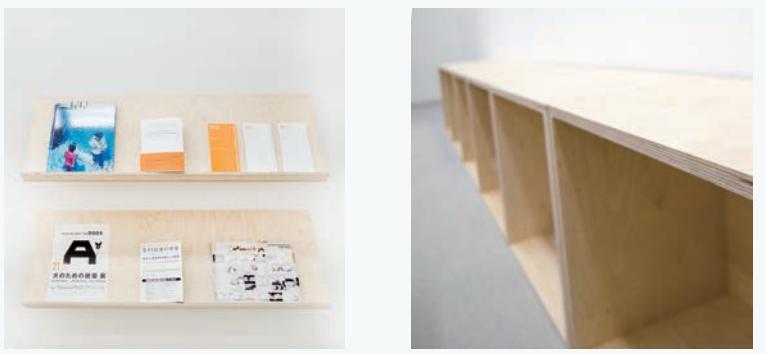
装い新たになったサポートスタッフ室では、思い思いの過ごし方をし、集い、未来を語らうことで、新たな情報発信の場となることを願っています。

dot.architects

家成俊勝 赤代武志 土井亘



1



4

5



6

7

1.全体の様子
2.小窓
3.テーブルトップ
4.本棚(中村好文展の什器の再利用)
5.手荷物ボックス
6.ハンガー掛け
7.ホワイトボードの裏面(既存ロッカーの再利用)

dot architects (ドットアーキテクツ)
家成俊勝、赤代武志、土井亘の3人からなる建築ユニット。大阪・北加賀屋を拠点に活動。設計、施工のプロセスにおいて専門家・非専門家に関わらず、さまざまな人との協働を実践している。リサーチプロジェクト、アートプロジェクトなどにも関わる。



何で 恋してんだろ

差出人：川江英樹
宛先：みらいカフェ
日時：2015/02/23 07:24

ぼくの街をもっと好きになりたい、もっと知りたい、
まちづくりに参加したい、だれかの役に立ちたい、
と思っていても、毎日、適当に過ぎていくだけ。
何もできないし、何も行動起こさないし。
何かやりたいって、みらいカフェに参加してみたものの、
ただずっと外から見てるだけじゃん。
今日だってなにも話せなかっただ。

ぼくには何ができるの？

もともとアートだって苦手なので、1年前までは友達に
誘われない限りほぼ来なかった21歳だけど、
みらいカフェのおかげで自分の意思で足を運ぶようになり、
最近はなんだかいとおしく感じる。
(アートそれ自体は相変わらず分からぬけど。)

ちょっとお花に目を向ければもう好きになりそうだし、
それを通じて知らなかつことを知つたり。

今日から見方が変わった。

今までひとつひとつまったく気にしたことすらなかつ
ことだつて、どれも面白い。

まるびい「よるまっし！」マップ

まるびいの近くにある「よるまっし！」(ぜひ寄ってみてくださいね)
と言いたくなる10の場所をちょっとだけご紹介いたします。



1. 「金沢カレー」の元祖といえばここ！
2. とても新鮮なお刺身が破格で食べられる。2012年「食べログ」日本一のお店。
3. 美術館の駐車場が空いていないときは、こちらをチェック。
4. 加賀藩主・前田利常が築いたお堀を眺めながら、ゆったりできる甘味処。旬の果実のかき氷は絶品！
5. 老舗の和菓子と洗練された洋菓子のスイーツはここで。日曜日は焼きたてのパンも並びます。
6. 春には地下駐車場への階段横に緑の桜が咲きます。「御衣黄」という名前らしい。
7. 夏は広場からお堀の上をほたるが舞うのがみれるかも。
8. 美術館の広場になんと畑が！ 運営はみらいカフェ。ハーブや藍などいろいろな植物が共生しています。
9. おしゃれなヴィンテージの北欧雑貨と家具に囲まれて、美味しいコーヒーでほっこりといき。
10. 工芸の人間国宝認定数が日本一である石川県。その伝統工芸のおみやげが一堂に。

まるびいみらいカフェ

[ボランティア・メンバー]

石田道房 五十村紗知 岩垣豊 岩崎木綿子 岩本真希子
鵜澤一子 川江英樹 川守さくら 小泉希望 越野節子
斎藤菜青 新開愛 立岩辰美 長田あかり 西川幸洋
仁歩義晴 野村信行 林朋子 福田雅幸 松本収子
宮川俊則 宮本夏穂 村中泰雄

[スタッフ]

黒澤浩美 (金沢21世紀美術館 チーフキュレーター)
木村健 (金沢21世紀美術館 エデュケーター)
高橋洋介 (金沢21世紀美術館 エデュケーター／アシスタント・キュレーター)
渡辺秀亮 (まるびいみらいカフェ アシスタント)
片石憂衣 (まるびいみらいカフェ アシスタント)

みらいカフェだより #0

ディレクション：黒澤浩美

編集 & デザイン：高橋洋介

編集：木村健／渡辺秀亮／片石憂衣

写真：まるびいみらいカフェ ボランティア・メンバー (p.3) / 奈良雄一 (p.4)

武野一雄 (p.5) / 木村健 (pp.3-5) / 高橋洋介 (pp.1-4, 6-8)

イラスト & 手書きフォント：片石憂衣 (pp.1-7) / 新開愛 (p.3) / 武野一雄 (p.5)

木村健 (p.5) / 高橋洋介 (p.8)

発行：金沢21世紀美術館 [(公財)金沢芸術創造財団]

〒920-8509 金沢市広坂1丁目2番1号

T 076 220 2800 http://www.kanazawa21.jp

印刷：株式会社山越

2015年6月発行